

四 条 金 吾

一

由比が浜の朝である。砂地の小高い丘に腰かけて、二人の若い侍が話し合っている。

飯島の辺りに大きな船が着いておるが朝が早いので人影は一人もみえない。

二人とも、建長寺に昨夜は参籠しての帰り路、八幡宮より十八丁の参道をぶらりぶらり話をしながら、とうとうこの浜辺にきてしまった。

一人は家が長谷にあるからよいが、一人の家は比企谷にあるので大分廻り路である。

この辺で別れねばならぬので、暫くの間ここに腰かけて話をしているのであった。

「鎌倉は幕府の所在地としては、何んと言つてもせまい。近頃のように、こう家が建てこんでは益々狭くなる一方だ。ここに来て大きな海をみると、いつも俺はそう思うのだが貴公そう思わないか」

「だが、この鎌倉こそ天下の要害だ、無双の要害たる碓氷と箱根をとりでとなし、関八洲はその内城で、この鎌倉こそその牙城だ、そう思ってみよつ、鎌倉は小さくないぞ大きいぞ」

「三方は山で、一方が海、いかにも要害は堅固にみえる。要害堅固なだけに却つて外の状勢が分らぬ、この小さな所において天下の形勢が分るかなあ。

貴公は直参だから、そう思つてもよいかもしれないが、攻める方から言えば、またそれ相
当の弱点はあるものだ、鎌倉七口の中では先ず第一が稲村が崎だ、ああ干満の度合が著るしくて
攻手には究竟な大手と行く処だなあ」

「止せ止せそんな話は、止めておけ、時に話は違うが、近頃評判の小町の辻の日蓮、貴公はなん
と思う。あの禅天魔と言う叫び声、お互いに建長寺に参禅しておる手前、ききずてならん話では
ないか、貴公程の短気者が黙つてきいておる筈がない。どう思う、一度貴公に聞いてみたいと思
つていたのだ」

「その事よつ、実は拙者の方から先きに貴公に聞いてみようと思つておつたのだが、言い出し
かねておつたのだ。本当のことを言うとおの聖人の辻説法は、拙者は実は心服しておるのだ」

「ええつ心服つ」

「そうだ心服しておる。だが、それが言い出せなかつたのだ。貴公だから、打ち明けるが本当な
のだ。建長寺の唐風づくりの金殿玉楼の贅を極めた仏殿になくて、仏法の真理はあの小町の辻の

薄鼠白五条の塵にまみれた聖人の説法の中にあるような気がするのだ。拙者はそれを求めたいと、実はひそかに願っておるのだが、まだぶつかってゆく勇氣がないのだ。何処かで疑っておるのかわからんが」

「おいおい貴公の方が、俺を建長寺の参禅へすすめた位でいながら、今更、そんなことを言う奴がおるか、それこそ天魔の声だぞ」

「だから、仲々、言い出さないでおったのだ。貴公が口を切ってくれたので、実は有難いと思っておる」

「貴公も代々江馬家に仕えるれっきとした医者だ。学問識見その医術、友人ではあるが拙者は貴公を尊敬しておるのだぞ。それがそのようなことを言い出すには根拠があるろう、それを聴かせろ、ただ、日蓮が諸宗を罵倒しておる勇氣に感心したなぞとは言わせぬぞ、どうだ。きこう」

「待て待て、拙者は貴公の言われる通り、医術を業とするものだ。常日頃、眞の医術は人の肉体のみを救うものではなくて、魂を救うものだと思っておる。現在の医術は草根木皮を煎じて、人の肉体を治療しておるが、これで医術はよいのだろうか、それだけが、医術の全部なのだろうかと考えたのだ。そう思ってみると、患者に投薬するのが恐ろしくなってきた。禅にこったのも実はそれが動機だったのだ。その悩みは解決できなかった。和尚の提示してくれる公案を、あつちをひっくり返し、こつちを突ついて、想を練った。その間中は実に面白い。生活から遊離した公

案だから想を練るには面白い。たまにわかったような気がすれば悟ったような気持にもなる。だが悩みは解決されぬ。禅宗の悟りとは悩みを悩やまぬことだとわかった。だが、それでは医者として患者に接してゆけぬ。医者とは患者とともに悩んでやらなければならない。莫妄想とは簡単にやってゆけぬところに患者のいたみがひそんでおるのだ。坐禅一方では拙者の悩みは解消せんぞと思つた時分に、あの聖人の説法を小町の辻で聞いたのだ。だから、口には出さぬが、あの辻説法には感心させられたのだ。そして或る日、あの聖人を名越の草庵に尋ねた」

「ええつ」

相手はさすがに驚いた。

「驚くだろう。だがまだこの珠数は切つてはおらない、そこ迄はいいくないのだ。昨夜貴公とともに建長寺に参籠して大臣山になく鼻の声を一晚中きいておつたが、頭の裡では名越の草庵を始めて訪うた時のことばかりで一杯だった。昨夜の公案などは実はそつちのけで、貴公にはすまぬと思つていたよ」

「こいつめ、ひどい奴だ、俺の顔が阿呆にみえたことだろう。禅宗は坐禅がすむと蚤をとるではないかなあ」

「そう迄言うな。小町の街頭で質問するのも礼を失すると思つて、或る日、あの聖人を訪ねたのだ。ところが最初から一撃をくつたぞ」

「今日本国の人は一人もなく重大病人であることを医者たる貴公は知らないか、とやられた。禅宗の公案よりはすごい勢いだ。拙者が当惑しておると「所謂、大謗法の重病である」と言われ「今の禅宗念仏宗真言宗等は余りに病重きが故に、わが身に覚えず人も知らぬ病である」と喝破されたのだ。更に語をついで聖人は語られた。浄名経、涅槃経には病いある人仏になるべしとある、それは病によつて道心を起すが故である、してみるならば病も仏のお計いと思わねばならない。故に病の原因を知らんと思わば、先ず仏のおぼしめしを知らなければ、人の病など治るものではないぞとさとされた。草根木皮を煎じて人の病の根本が治るものか、されば仏をば大医王とも名ずけるのだ。仏の良薬こと南無妙法蓮華経であると言われた。

進士殿、一度貴公とともに名越の聖人を尋ねてみようではないか、若しかしたら、拙者はこの禅宗の珠数をきるかも知れんぞ」

四条金吾と言われる若い侍は、進士太郎の眼前に、腕の念珠を示してみせた。

一一

聖人の名越の庵室に今宵は珍しく客人があつた。それは四条金吾という、今年二十六歳の若い侍である。名越家の江馬入道光時に代々医術をもつて仕える侍で、くわしく言えば、四条頼基通

称は三郎、金吾は役名で佐衛門の尉の唐名である。

時折、海の潮鳴りが、松風にまじつてきこえる静かな宵であった。

鎌倉の小町の辻で、聖人の大獅子吼を耳にした四条金吾は、己が帰依するところの禅宗を強く破折されて、始めはいきどおつだが、冷静になつて考えてみると、何か心に引かれるものを感じて、路傍で詰問するような、はしたない真似はせず、堂々と聖人の庵を尋ねたのであった。その訪問は無論聖人から歓迎された。

小町の辻でみた聖人は巍然として、とりつく術もないような、所謂秋霜烈日といったような観があつたが、庵室の聖人は、それとは全く異なつて、春風駘蕩たるの感じであつた。客に接する態度ではなくて、家人に面するような安易さがあつた。

「四条殿つ」

聖人は言葉をつづけた。

「仏法はもともと唐来ものだと思つておるであろうが、そろそろその考えを捨てねばならん時期が来ておるのだ。大体がこの国の仏教はすべて唐来ものであつた。某の僧侶が支那へ留学したら念仏が流行しておつた、それでその流行しておつた念仏をこの国に流行させた。その次に某の法師が支那へ渡つたら、念仏の宗旨はとつくにすたれて、禅宗が大流行であつた。それで、今度は禅宗をもつてきてこの日本国に流行させる。すべてがこの調子であつた。遠い昔に三論法相等

の宗旨が弘まったのもこの轍であった。

しかしこれではいかん。彼の国に流行した法が必ずこの国によしという法はない。時と処とが異なれば、必ず人の心は異なるものだ。さりとて人心にのみ迎合する教であつてはならぬが、それを全く無視した教であつてもならない。

ここをよく考えねばならない。日蓮は私の心を去つてこのことを考えた。私心を去るとは仏の説の如く仏教を考えることだ。

仏の教とそれをきく人の心、所謂機と時代と国家と、仏教の流布の前後即ち序の五つの方面から仏の教えを考えてみることだ。これを教機時国序と一口に言う。この五つの面から考えれば今は一体いかなる時代であるか、仏教から申せば今の時代は末法と言う時代だ。

日蓮がいうのではない。仏自らが白法隠没といわれて、仏の正しい法が失われる時代であるといわれておる。仏の滅後、正法千年、像法千年をすぎて今は末法の時代、末とは無の意味で、仏の正しい法は無いという時代に入つておるのだ。

いま日本国の人々は、われわれこの娑婆世界にすむ人間には、全く無縁無関係の西方の弥陀の称号を異口同音に唱えて、一向に釈迦如来の名号を唱える人は全く一人もおらない。

釈迦如来の教えが正しく行われておるならば、誰が念仏を唱えるものであろうか。誰が観世音の名号を唱えようか。すでに釈迦の教が、末法にはいつて、行われておらないと言う証拠は歴然

としておるではないか。

しからは末法たる今の世は、仏もなければ法もないのであるうか。否、仏はこの時代を予見せられて、その末法、その白法隱没の時代に流布すべき大法を残されておるのだ。

今末法に入つてやや二百歳、日蓮は仏滅後二千七百七十一年に生まれて本年三十二歳、この大法を弘むるの人なりと覚悟し、仏の予言に従つてこの土に生を受けたりと確信して、小町の辻に立つたのである。その大法とは法華経であり南無妙法蓮華経なること勿論である。四条殿、日本国の一切衆生は、今日蓮によつて始めて、末法における大法たる南無妙法蓮華経の声を耳にするのである。釈尊もその心中にはあれど、時ならざるが故に秘し給うた南無妙法蓮華経を五濁悪世の末法なるが故に、今日蓮が南無妙法蓮華経は声をおします唱えるのである。

五濁悪世の末法なるが故に、日蓮が振舞は仏の久遠の時代の如くあらねばならない。日蓮がこの大法を説くに殿堂に住せず、塵、埃りにまみれて鎌倉の辻々にたつ因縁もここにある。仏が始めに法を説かれた久遠の時代の任務はなんであつたか、下種結縁である。末法の振舞も久遠の振舞も同じである。末法即久遠、久遠即末法である。

末法なるが故に今は下種結縁の時代である。南無妙法蓮華経をもつて日本国の一切衆生に下種結縁するの時代である。

法華経は八か年にわたつて釈尊が説かれた法であるが、この法華経の付属が舍利弗、目連等々

の仏在世の弟子達に何故なかつたかを考えてみなければならぬ。また、迹化の菩薩方がわれこそ末法において法華経を弘むるの人たらんと仏前に誓言を立てたのにもかかわらず、仏はこれを退ぞけて、なに故に地涌の上行菩薩に末法における法華経流布の任務を与えたか。

仏は悪世末法の世の中が、仏の滅後、二千年たてば必ず来たと予見されて、その時まで、この大法を上行菩薩に付属されて、秘しおかれたのである。

末法においてこの菩薩がこの土に出現することは仏の予言であり、この菩薩の出現がもしなければ、仏の一切の所説は皆偽妄となり果てるのである。四条殿っ」

聖人はにっこり笑つて言葉をきつたが、更に強く言われた。

「御貴殿もこの日蓮を詰問にきたのであろうが、先ず釈尊を否定せねば、この日蓮は否定できぬぞ……」

「仏法が唐来ものであると言う時代がすぎさつたと言われるならば、聖人の唱える南無妙法蓮華経と言う仏法は、いずれの国の仏法でございますか」

四条金吾は聖人に問うた。

「南無妙法蓮華経はいずれの国の仏法かと問われるか、四条殿、御貴殿はいずれの国の人かと問われて何んと答える……」

「……」

四条金吾は聖人に答えるすべがなかった。

「余りわかりきったことで返答につまるであろう、ははは……四条殿、御貴殿は日本の国の人じゃ、日蓮の南無妙法蓮華經と唱える教は、日本の国の教だ。經文に明示されたる如く、仏滅後二千五百年中に日本において始めて唱えられたる南無妙法蓮華經という日本の仏法だ」

「日本の仏法！これはこれは珍しいことをうけ給まわります。仏法は既に印度に起り支那朝鮮を経て我が国に渡来いたしましたもの、これに日本の仏法などと称するものが果たしてありましようか、ちつと疑問にございます」

四条金吾思わず言葉に力を入れて聖人にせまつた。

「四条殿つ、御貴殿は太陽を拜んで、あれを日本の太陽とみられるか、或は隣国支那の太陽とみるか、遠くは天竺国の太陽であると考えられるか。まさか、そんな愚かな考え方はいたすまい。仏の教もその日輪の如きものだ。どこの国の太陽でもない、と同時に、またどこの国の太陽でもある。仏法もまた、その通りである。釈尊は印度に出現して一切經を説かれた。但し法華經の流布は悪世末法の時代とし仏の滅後二千年と時代を断定され、しかもその流布者を法華經に指定されておる。法華經こそ釈尊の滅後における生命である。この生命も流布すべき時代が来なかつた故、二千年という長い間いたずらに経藏に埋もれて、文字のみの法華經であつた。しかしながら、釈尊の教が滅亡し仏教という仏教が、その經文を説いた釈尊を全く輕侮して、大日如来を信じ阿弥

陀仏を礼拝するといった悪世の末法において、始めて法華經の生命は脈うつてくるのである。

この法華經は伝来の当初より東方の国に縁ありとされて、東へ東へと渡つてきたのである。法華經寿命品に如是東行とあるが如く、この法華經も東へ東へと招来されてきた。東の果なる国の日本の国へと法華經は如是東行してきたのである。日本の国において法華經の東行はきわまつた。もののきわまる所はものの始まりである。

日本国を中心として法華經が世界中に弘まつてゆく証拠はここにある。

釈尊の仏法は東漸して日本に来たつたが今日蓮が弘むる南無妙法蓮華經は、日本国を中心にして却つて西漸すべき仏法である。

なんとすれば、既に印度支那においてすら釈尊の教えは經文の千言の如く行われずしていたずらに仏を誹誇する教のみが行われておる。

四条殿つ、南無妙法蓮華經とは仏の名号ではない。仏は何処より生まれてきたのかを考えたことがござるか。仏は何によつて悟りを得たかを思ったことがござるか。今日木国の人々は仏は拝むべきものと思つて、自分達よりも遠い所に仏を置いておる。所が仏はただ拝むべきものではなくて、実は自分達が到達すべき境地なのだ。法華經の自我偈の末文には速かに仏身を成就することを得せしめんとあるが、これが仏の衆生に対する願望である。では、何んによつて、その仏身を成就することが出来るであらうか。ただ仏を拝むことのみによつてはその境地には達せられな

い。

仏が仏になったのは南無妙法蓮華經の力である。故に南無妙法蓮華經は三世十方諸仏の御師とも称し、三世十方諸仏の父なりとも言うのである。

釈尊すら南無妙法蓮華經即ち法華經を師匠としてその悟りを得たのである。この南無妙法蓮華經が、今日本国を中心としてこの日蓮によつて一閻浮提に弘まつてゆく。印度支那に起つた仏法は、二千年前の過去の仏法であつて、当今の如き悪世末法の衆生は到底救うことも出来ぬ教である、釈尊すら南無妙法蓮華經とは唱えられてはおらない。しかるに日蓮が只今南無妙法蓮華經と大声に叱陀する由縁は、これこそ新しき時代の、新しき仏教として、しかも日本国を中心にして月支漢土にも弘まるべき仏の教なりと、經文によつて判断するが故である……」